Title	特別講演「超越の言語と教育」
Author(s)	小倉，義明
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume24, 2009.3 : 105-114
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3252
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

特別講演

「超越の言語と教育」

小倉義明

〈序〉人の心に言葉が入るということ

いつぞや教会で結婚式がありました。結婚式の後、私学会館で披露宴があり、私はそこへ出かけたのです。披露宴が始まるのにちょっと間がありますので、ソファーに掛けて本を読んでおりましたら、声が掛かるのです。「どうだった、結婚式は？」という、いささか乱暴な話し掛けで、びっくりして顔を上げますと、私への語り掛けではなくて、私の前のソファーに座った人への呼び掛けでした。私の前にいた人はこういうふうに返事をするのです。「何だか知らんが、愛とか忍耐とか、そんなことを言っていたよ」と言うのです。これは明らかにコリント第一の手紙一三章の言葉ですね。この人は多分初めて教会の結婚式に出たのでしょう。愛とか、忍耐とか、耳慣れない言葉を聞いて戸惑いを感じられたのでしょう。他方、子どものころ、例えば教会学校とかクリスチャンスクールに通ったことのある子どもにとっては、イエス様とか、お祈りとか、子どもながら聖書を通して知る言語は、ごく自然な当たり前のことなのです。けれども、世間の人々にとっては馴染みの薄い、身につかない言葉なのでしょう。

このことから私たちは、人の心に言葉がどのようにして入るかということを考えさせられるのです。言葉と経験はどちらが先か。経験があってはじめて言葉が身につくとも言えるし、まずは言葉が先に入って、経験がそれを裏打ちするのだとも申せましょう。「鶏が先か、卵が先か」ということに近いでしょうが、教育に関する限り、まず言葉が先に入るのではないでしょうか。まだ何も表現の出来ない赤ちゃんのうちから、母親は絶えず話し掛けています。その言葉を聞いて聞いてその言葉によって赤ちゃんは世界を捉えます。赤ちゃんだけでなく幼児から少年、少年期から青年、成長するに及んでもやはり言葉が先に入ってきます。大学教育においても、学生は各種学問で術語や概念規定とかを聞かされ、それらを手がかりとして事柄の分析や理解へと進みます。たとい自然科学の畑で実験を必要とするような場合でも、実験を支える根底にはある論理が用いられており、その論理は言葉から成り立っているのではないでしょうか。

そういうわけで、教育において言葉が極めて重要な働きをしているということを、まずここで申し上げておきたいと思うのです。その上でキリスト教大学として、本学が何を語りうるか、何を語るべきかを考えてみたいのです。わかりやすいために、初めに端的に結論を申しあげておきますと、本学は神の言葉を取り次ぐことをもって教育の究極の目標としています。本日の私の話は、この究極目標の持つ一、二の含蓄についてです。

〈一〉聖についての理解

聖学院大学はその名の示すように、聖なる者を指し示す大学です。聖なる者とは、とくに超越者としての神、あるいは超越性において理解された神のことです。旧約聖書における「聖」はクォーデシュと申します。その語源は

ヘブル語を含む西方セム語において、「分離」もしくは「隔たり」を意味するものでした。このことについては、一昨年のこの新年研修会の開会礼拝において、私は言及させていただきました。本日はこの点を踏まえつつ、一歩、二歩先へ歩み出してみたいと思っております。

神が聖なる者として人間や俗界から懸絶・隔絶しているということは、神が絶対他者であり、倫理的・理性的な理解を超えるものであることを意味するものでした。マールブルク大学の神学者、ルードルフ・オットー（一八六九～一九三七）は、当時の倫理主義への批判をこめて、『聖なるもの』（一九一七）を書きました。その立場は、神の他者性を確保する限りで正しいと思われますが、しかし、あまりに非合理性・神秘性が強調されますと、彼の造語「ヌミノーゼ」が示すように、不可知論の闇に引き込まれることになります。例えばジョン・ヒックのような宗教哲学者が、「神を認識論的に知るのは不可能だ」と不可知論へ走るように、です。しかし、聖書の神は人間に向かって語りかけるお方なのです。

聖書の神に初めて直面したときのモーセの経験（出エジプト記三章）をたどってみましょう。モーセはホレブの山、シナイ山で柴の燃える有様を見ます。柴は燃えているのですが、いつまでたっても燃え尽きません。不思議に思って、彼は近づいて調べようといたします。すると炎の中から声が聞こえるのです。「ここに近づいてはいけない。あなたが立っているその場所は聖なる地だから」。こういう声がするのです。神は明らかにここで聖なるお方として、人間の単なる探求によっては接近できない他者性を宣言しておられるのです。けれどもそれだけではありません。その宣言は〈言葉〉をもって語りかけられているのです。しかも宣言は続いて、神はアブラハム、イサク、ヤコブの神であるという自己啓示となり、その上、エジプトの地で奴隷として虐げられているあなたの同胞を救出しなさいという訓示になるのでした。すなわちモーセの神は聖なるお方ですが、しかし人間を拒絶する神ではなく、

人間を救済しようとする神でした。神はそのご意志を、言葉をもってモーセに示達しているのです。聖書の神は聖なるお方として超越者、絶対他者であられますが、その超越者は人間に言葉をもって語りかけてくる人格的他者なのです。

〈II〉超越（聖）理解の転換

ストラスブールとハイデルベルクで教えたヴィルヘルム・ヴィンデルバント（一八四八～一九一五）は、カントの批判的方法を継承して、普通「新カント派」と言われますが、カントが批判的方法を専ら数学や自然科学の領域に適用したのに比べて、彼はもっと広く文化価値の全領域にまでそれを適用しました。ヴィンデルバントによれば、宗教は学問、道徳、芸術のいずれにも従属せず、むしろそれらを統一するものでした。宗教的価値である「聖」は、真善美の規範意識の統合として経験されたものでした。私たちは「聖」が真善美の統合であるとするヴィンデルバントから多くのものを教わります。けれども、彼の「聖」の理解は真善美の統合もしくは包括するものとして、「動き」あるいは「働き」の要素を認めうるかも知れませんが、その基調は文化価値の哲学的な再構成という趣で、その観念性はやはり否定できないところではないでしょうか。

これに対し、「聖」はあたかも北極星のように人間から懸絶した彼方に、スターティックにあるのではなくて、ベツレヘムの星のように動き出して、歴史に関わるものだということを示されたのは、大木英夫博士でした。大木先生は書かれておられます。「神の超越性とは、彼岸が此岸から隔絶しているということではなく、その隔絶を乗り越えて彼岸から此岸までやって来ることである」と（「神の超越について」一九七三。『歴史神学と社会倫理』所収）。

ここには「聖」あるいは「超越」の理解についての転換があります。それは隔たりを乗り越える「動き」なのです。この把握は明らかに聖書的であります。それは神がイエス・キリストにおいて受肉し給うたという新約聖書のメッセージを踏まえた理解です。

使徒パウロは申します。「キリストは神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべきこととは思わず、かえっておのれを空しうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」（ピリピ書二章）と。ここで表明されているのは、超越者が人間救済のために動き出し、贖罪のための犠牲的死を遂げられたというイエス・キリストの出来事の特別の見方です。これが福音です。この福音のメッセージによりますと、超越者の「聖」は人間へと向かって動き出し、ついに犠牲的愛にまでなったのです。この出来事が歴史的世界の中では衝撃的であったため、その出来事に含まれる深遠な含蓄は次々と新しい言葉を生み出しました。

〈III〉超越の言語と教育

若者サウロはキリストの出来事に直面し、衝撃を受け、打倒されます。しかし再び立ち上がらせられたとき、彼は使徒パウロとなって新しい言葉を、すなわち、超越がインマヌエルとなって人間のもとにまで来られた事実が含蓄する豊穣な意味について、語り出したのです。

私の話の冒頭で言及した結婚式についてのエピソードに出てきましたのは、第一コリント一三章でした。このメッセージは使徒パウロが語り出した「超越についての、新しい言葉」の一例です。ヴィンデルバントにおいては

「聖」は真善美を統合するものでしたが、第一コリント書においては神の犠牲愛は信仰、希望、寛容、慈悲、忍耐などを包括いたします。さらにガラテヤ書5章におきましては、愛は展開して、喜び、平和、寛容、慈愛、忠実、柔和、自制などに結実すると言います。

ここに見出されるメッセージは、神の超越は人間から隔絶し、人間を峻拒するのではなく、かえって人間のもとにまで来て愛の力となって、人倫の中にそれの結実をもたらすということです。このことは、神の愛の事実は語り告げられ、教えられていくものであるということを示しているのではないでしょうか。それは伝道と教育の可能根拠なのではないでしょうか。そうであるとするなら問題は、私たちはどこまで〈超越〉について語っているか、どのように〈超越の言語〉を語っているかでしょう。端的に申しますと、私たちは私たちのなしている教育の中に、どこまで、どのように聖書の言葉を語り伝えているだろうかということです。

教育実践にあたり、私たちの用いる言語がいかほどに重要な意義を持つものであるか、そのことを考えさせてくれる事例を一言申しあげたいと存じます。以下は、アンリ・ピレンヌ『ヨーロッパ世界の誕生』（一九三七）からの引用です。

紀元四世紀の後半から紀元五世紀の前半に、皆様ご存じのようにヨーロッパにおきましてゲルマン諸族が激しく移動します。フランク族、アレマン族、ゴート族、ブルグンド族、ヴァンダル族。ヴァンダル族はイベリア半島からジブラルタルを越えて、アフリカに渡ります。そしてついにカルタゴを滅ぼします。このときカルタゴのすぐ隣の都市ヒッポの司教だったのが、アウグスチヌスです。蛮族に都市が攻略され、国家が瓦解していく有様を感じ取りながら、彼は「地上の国は過ぎていく。真に永続するのは神の国だ」ということを考えていたのです。

ところで申しあげたいのは、ヴァンダル族のことではなくて、それと言語的には同系統の西ゴートのことです。

その族長はアラリッヒです。勇敢ですけれども粗野な男でした。紀元四〇一年、彼とその軍勢はイタリア半島に侵入し、ローマ市を劫掠します。その際彼は、ホノリウス帝の妹ガラ・プラシディアを拉致するのです。ここでアラリッヒは死ぬのですが、その後を継いだのがアタウルフです。彼は紀元四一四年、帝妹プラシディアと結婚いたします。アタウルフによって一つの宣言が発せられますが、それはこの結婚のときだったと言われます。以下、その宣言の一節をご紹介いたします。

「余は最初ローマの名をこの世から抹殺し、ローマ帝国をゴート帝国に置き換えることを熱望した。俗に呼称するローマ世界がゴート世界となり、アタウルフがカエサル・アウグスツスに代わるのだと。しかしながら、長年の経験が余に教うるところでは、ゴート族どもの放縦なる野蛮さは、凡そ法律なるものと相容れない。ところで法律なくして国家は存立し得ない。それ故現在余はむしろ、ローマの名声をその完全な形において復興し、更にこれをゴート人の武力によって、高めるという光栄を担いたいと考えている。帝国にとって代わることが不可能である以上、余はむしろローマの復興者として後の世に称えられたい」。蛮族の族長が、自分たち蛮族には法がない。法がなければ国家の運営はできない。だからゴート族だけで帝国を作る希望はあきらめて、ローマ帝国が持っている遺産を受け継いで、ローマ帝国の復興者として自分の名を残したいと、こう考えているのです。

この宣言を引用した部分でピレンヌが脚注を施して、次のように書いているのが興味深いところです。「E・シュタイン（ピレンヌがよく引用している先行の研究者）は、アタウルフの政策が、結婚後はローマに対して友好的であったと見ている」（前掲書、一六頁）。近年中公新書として刊行されました、鈴木康久著『西ゴート王国の遺産』という本の中でも、著者はこう書いています。「彼（アタウルフ）は次第に信仰心の篤い妻プラシディアの説得や助言によって、穏やかな性格となっていった」（四八頁）と。族長アタウルフの人格や政策の変化は、族民全体の変化

の兆しと申せましょう。ピレンヌはこう書いています。「ゲルマン族民とローマ人婦女との結婚は、かなり不断に行われたに相違なく、またその子供はむろん母方の言語を話したのであった。明らかにこれらのゲルマン人たちは、驚くべき速さでローマ化したに違いない」（前掲書、三五頁）。ここの叙述の意味はこういうことでしょう。ゲルマン諸族は蛮力でローマ帝国領を引き裂きましたけれども、その子らの世代に早くもローマ化されていきました。そのローマ化された中心的な理由は、母親の話す言語にあったのです。すなわち母親の言語、ラテン語が子どもたちの言語になるのです。ゲルマン族民の子どもらの母語となるのです。ということは、ゲルマン諸族にキリスト教とローマ法が入ったということを意味いたします。

以上の歴史研究の一こまをあえてご紹介申しあげましたのは、私たちは幼少年期に、とくに母親を通して聞かせられる言葉が、子どもらの人格形成に重大な影響を与えるということです。しかしこのことは幼少年期に限らず、また家庭の中での言語に限られることなく、青年たちがその人間形成の途上で聞き取る言語の意義についても、同様のことが言えるのではないでしょうか。このことは教育にあたる者がその語る言葉によって、後進にいかほどに手引きになれるか、その可能性を意味するでしょう。可能性があるということは、同時に私たちにとって課題でもあるのではないでしょうか。

〈結語〉

結びとして、なお一、二のことを申しあげたいと存じます。

(1) 聖学院大学は、人間の世界には〈聖〉の次元のあることを、学問的探究と教育活動において指し示します。

聖学院大学は、超越者の〈聖〉がイエス・キリストにおいて人間のもとにまで来たり、ついに〈愛〉にまでなった、その「動き」に注目します。

その「動き」は言葉を伴っており、人間の理解可能性を保証しつつ、私たちの理解に向かって呼びかけています。

(2) 超越者の言葉を聞き取るなどということは、もとより単純な可能性ではありません。預言者イザヤは神の現臨に触れたとき、「ああ、私はわざわいである。滅びるばかりだ。罪あるこの目が神を見奉ってしまったから」と、恐れおののきました。このように超越者の神聖性、聖性を真剣に本気で受け止めねばならないでしょう。とくに日本のようにそれが見当たらない精神風土の中では、むしろ強調すべきでしょう。

(3) しかしながら、聖なる御座から出て、ついに愛にまでなり給うたお方は、「私はあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」(ルカ福音書二二章三二節)と言われるのです。私たちは愛にまでなり給うたお方の祈りに助けられ、守られているのです。その上このお方は、いかに祈るべきかを知らない私たちのために、このように祈りなさいと「主の祈り」を教えられたのです。このことが、私たちが祈りうる祈りの可能根拠です。人間の側から超越者へと語りかける道が備えられているのです。したがって、祈りは、人間的に申しますなら不可能ですが、しかし神においては可能であるという意味で、「不可能の可能性」と申せましょう。

(4) 私たちの教育は、つまるところここまで行くのではないでしょうか。教育もまた単純な可能性ではないでしょう。ましてや教育の中に超越の言語を導入するなどということは、なおさらです。それにもかかわらず、私たちを教育の業へと導き出された方は、「祈れ」と、神の言語を発してよいと許し、奨められるように、教育の業を私たちに許し、それを奨め給うのです。こうして私たちの教育は「不可能の可能性」の性格を持つことになります。

(5) 超越の言語を教育の中に持つとは、私たちの教育が単なる人間の地平の枠内ではなくて、それ以上のもの、超

越の次元に向けて開かれていることを意味するでしょう。私たちの学問研究や教育の業が、自己目的的・自己完結的なものではなくて、神と人とに奉仕するものであることを意味するでしょう。そしてまたそのことは、教える者自らがそのようにして自己目的的でなくなるとき、すなわち超越の前にへりくだるとき、その生き方や探求の仕方自体が、青年学徒に一つの教育となるのではないでしょうか。それはあれこれの知識の伝達である以上に、生きるということが何であるのか、学ぶということがどういうことであるのか、人間に本質的な課題についての示唆を与えることになるでしょう。そのような仕方で、私たちはこの大学の中心に礼拝がある、超越に向かって心を開いているということが、極めて重要だということを感じさせられるのです。

ご清聴ありがとうございました。

（二〇〇八年一月五日、二〇〇七年度新年教職員研修会、基調講演）